来賓挨拶

台湾基督長老教会
林芳仲（リムホンティオン）　副総幹事

第38回日本基督教団総会に参加させて頂き、光栄である。また今年2月に台湾基督長老教会と日本基督教団の協議会が、開催できたことは感謝であった。東日本大震災被災地の救援と復興の経験を分かち合うことができた、地震・津波・原子力発電所事故の被災地での救援に少しでも役立てれば幸いである。今年3月に石巻、陸前高田などを訪問させていただき、被災状況の深刻さを改めて痛感した。完全に復興するまでの長い道のりを両教会で継続して力を合わせ、一日も早い復興を実現していきたく願う。今年の夏、台湾から98名のボランティアを派遣した。報告しておきたいことは、このボランティアには1、000名の応募があった。台湾の若者はこの機会に、貴教会と共に被災地の復興を心から望んでいる。聖書に書いてあるように、一つの部分が苦しめば全体が苦しみ、一つが喜べば全体が喜ぶ。神さまから与えられた資源をどう使うべきか、さらに学び、共に歩んでいきたい。日本と台湾の教会が人権と正義などの普遍的価値の実現のためにも共に力を合わせていけるように願う。

最後に、貴教団を代表して台湾基督長老教会総会を訪問される予定の、石橋議長・飯島幹事を歓迎し、今後より一層の協力の機会を与えられることを心から望んでいる。この総会が滞りなく行われることを心から願い、神さまの祝福が豊かにあるように祈る。

聖餐礼拝

総会第3日目、午前8時30分から井ノ川勝山田教会牧師の司式により聖餐礼拝が持たれた。「しかし、主の言葉はとこしえに立つ」（ペトロの手紙一1章22節～2章4節a）と題して説教。

「今総会1日目、教会員の葬儀を司式をしていた。この方は、ライカー宣教師の志を受け継ぎ、敗戦直後から40年、教会幼稚園教諭として生涯をささげた女性である。

ライカー宣教師は、アメリカより日本へ遣わされ、1913年、伊勢神宮の前に教会・幼稚園を創設した。しかし、アメリカに強制送還させられ、戦後、教会に一通の手紙を送ってきた。そこには、『戦争をくぐり抜けて教会・幼稚園が生き残っていたことに驚いた。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉はとこしえに変わることがない』と書かれてあった。ペトロが迫害の中、死と向き合いながら語ったイザヤ書による御言葉である。

預言者イザヤはバビロン捕囚時代、国家も神殿も枯れ果て、荒廃の真っ只中で、立ち続けるものがある、神の言葉はとこしえに立つと語った。

ちいさな群れを支え続けたこの御言葉に、私たちも立ち続ける。教会員の火葬の際、やがて伝道者である私も草のごとく枯れてゆくことを身にしみて心に留めた。私たち人間は一瞬にして死ぬ。しかし、ただ一つ、主の御言葉はとこしえに立つ。滅ぶべき私たちは、主の御言葉のうちにのみ生きる。

主の御言葉は聞くだけでなく、味わう言葉。聖餐は主の言葉が永遠に変わることがないことをあらわしている。聖餐の度に、罪に死に、生ける御言葉によって新たに生れた、洗礼の出来事を味わい深く知る。同時に、骨と化した私たちをよみがえらせてくださる終わりの日の喜びを共に味わい知る。その喜びを、ライカー宣教師は手紙の中で次のようにあらわしている。『年老いた私が再び伊勢に帰ることは出来ない。しかし、アメリカと日本は遠く離れていても、聖餐を味わうごとに一つとされ、神の国で共に集う食卓を仰ぎ望むことができることは何という喜びでしょう』と」。一同感謝のうちに、教団信仰告白を告白し、聖餐の恵みに与った。

第二日目　夜　**解放劇**

「希望を生み出す」

総会2日目夕食後、休会中には、恒例の解放劇が上演された。隔年の総会毎に上演されてきた解放劇は、今上演で10作目、20年続いたことになる。演題は「希望を生み出す」。ロマ書5：3～5をテキストとする劇である。

5年間無牧だった教会がやっと女性の牧師を新しく迎えることができた。無牧を忍耐した教会にとって松井牧師は希望である、と役員は語るが…。

就任から半年が過ぎた、ある日の役員会で、松井牧師は、教会で行なった前回の部落差別の研修に続いて、今回は性的少数者差別についての学習会を行ないたい、と提案する。だが、役員の受け止めは積極的ではない。差別の問題は重要だとしつつも、教会にはもっとすることがあると、教勢を伸ばして経済的にも余裕を持たせることがまず大切だと、やんわりとしか牧師に意見できない。

この教会には、牧師を目指して神学校に進もうという谷田青年と、被災地ボランティアに励んできたやまぐち青年がいる。二人とも教会で幼いときから育ってきた。やまぐち青年は、教会でボランティア報告会を行い、牧師からも役員からも称賛される。しかし実は、彼はもうボランティアに来なくていいと、現地で言い渡されたことに悩んでいる。一方、谷田青年は、彼女を幼いときから熱心に教会連れてきてくれていた母親が今は教会に通っていない。松井牧師の前任者のもとで、5年前に教会で起こった事件がきっかけで教会から離れてしまったのだ。谷田青年自身は、母が部落に生まれたことをこれまで意識したことはなかったが、5年前に母を巻き込んだ事件のことを知り、教会役員会に強く抗議することになる。

5年前に教会で起こった事件とは、前任の牧師が部落の地域での家庭集会や訪問を行なわなかったこと、また聖餐式は牧師の専権事項として谷田青年の母親をはじめ部落出身者を聖餐式の配餐当番から外したことだった。結局、この事件に教区が事実確認の調査に入り前任牧師は転任することとなった。教会は、しばらく落ち着くまでと、教区の後任推薦も受けることができずに5年もの無牧を過ごさねばならなかった。

谷田青年の抗議に対し、牧師が辞任したあと教会もとても傷ついたのだ、というのが役員たちの訴えるところだが、谷田青年は、実際傷ついたのは誰か、と役員会に強く問い糾す。

エンディングでも何も解決していない。教会には依然として事件によってできた傷が残り続け、再びこれが開いてしまった。ただ、ボランティアに来ることを断られたやまぐち青年は、自分は何ができるかの答えを被災地に求めていたのではないか、と気付く。谷田青年は、牧師となって差別の無い教会を建てたい、と決心する。

震災後、はじめての教団総会で、解放劇でも震災について触れなければならない、ということであったのかもしれない。しかし、部落差別における課題と、被災地の課題をつなげようとするのに二兎を追ってちぐはぐしてしまった感は否めなかった。そこに共通の課題があるとすると何なのか。希望が生まれ、この希望が決して欺かないのは、教会が、教会へと来る人々のニーズに答えることによって起こるのだろうか。それとも、別のところに求める必要があるのだろうか。解放劇は前者であると答えているようだ。